

菩提樹の記憶：『失われた時を求めて』における 「復活」のモチーフ

中野, 知律
一橋大学大学院社会学研究科 : 教授

<https://doi.org/10.15017/1906133>

出版情報 : Stella. 36, pp.145-164, 2017-12-18. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン :
権利関係 :

菩提樹の記憶

——『失われた時を求めて』における「復活」のモチーフ——

中野知律

「プチット・マドレーヌ」とともにブルースト小説の特権的な挿話を構成する「菩提樹の煎じ茶」は、相方の菓子のほうが強い関心を集めてきたのに比べると、控え目な考察の対象に留まってきたように思われる。

「私」がパリの自宅で口にする「紅茶」に浸された「マドレーヌ」の「味」[I, 44] が、コンブレーで日曜の朝にレオニー叔母の部屋で味わった「紅茶か菩提樹の煎じ茶」に浸したマドレーヌ [I, 46]、さらに言い直されて「叔母の差し出してくれた菩提樹の煎じ茶に浸されたマドレーヌのかげらの味」[I, 47] であることに気づき、無意志的記憶の働きによって幼少期の回想が「全体」として蘇るところで「コンブレー I」は締めくくられたのだった¹⁾。続く「コンブレー II」のなかでマドレーヌ体験に対応するものとして語られているのが、以下に引く「菩提樹の煎じ茶」の一節である——

フランソワーズが叔母の紅茶を入れるのだった。あるいはまた、気持ちの高ぶりを感じる時には、代わりに叔母は煎じ茶の薬湯 (tisane) を求めることもあり、そんな時、薬袋から菩提樹 (tilleul) の分量を皿に振り出し、それを次に煮立ったお湯のなかに移さねばならないのは私だった。茎の乾燥が、一種の気まぐれな生垣の組格子のかたちを湾曲させていて、その組合せ文様のなかに、色のさめた花々が開いていた。それはまるで画家が花々を配置し、最も装飾的なかたちで花にポーズをさせたかのようにだった。葉はその様相を失い、あるいは変えてしまっていて、蠅の透明な羽や、ラベルの裏や、薔薇の花びらなど、この上もなくちぐはぐな物の様子をしていたのであるが、それらは積み重ねられ、挽き砕かれ、あるいは編み込まれて、ひとつの菓の作製にあてられているかのようだった。千もの小さな無用の細部——薬屋の魅力的な浪費と言おうか——は、自然ではない加工の準備であつたら取り除かれていたであろうものなのだが、まるで一冊の本のなかで知り合いの人の名に会って驚くときのよう、それがまさしく本物の菩提樹、駅前大通りで私が目にしてきたあの菩提樹の茎

であることを理解する喜びを私に与えてくれるのであった。その茎が姿を変えているのは、まさにそれが複製 (double) ではなくそれ自体であったからであり、それが老いたからなのだった。それに、新しい特徴一つひとつにしても古い特徴の メタモルフォーゼ 変形に他ならないのであって、小さな灰色の球のなかに私が認めるのは、時満ちるには至らなかつた緑の蕾なのだった。しかし、とりわけ薔薇色の輝きは、月光のように穏やかで、壊れやすい茎の森のなかに花々を浮かび上がらせていて、そこで花はまるで小さな黄金の薔薇のように宙づりにされているのだったが——それは、まるで消されたフレスコ画のあとを壁の上にまだ露わにしている灰明かりのように、木のさまざまな部位の違い、「色が付いて」いたりそうでなかったりしていた部分の違いの微なのだった——、そうした花びらは、葉袋を花ざかりにする前には、春の宵々を芳香で満たしていた (embaum[er]) ものでまさしくあったことを、私に示しているのだった。この大蠟燭の薔薇色の炎、それはまだ菩提樹の色ではあったが、今や自らの生となっている縮減された命のなかに半ば消えかけて静かに取まり、まるで花々の黄昏のようなその生のなかで微睡んでいた。やがて私の叔母は、煮立った煎じ茶のうちに、死んだ葉や萎びた花の味覚 (goût) をゆっくりと楽しみながら、そこに小さなマドレーヌ菓子を浸すこともあって、それが十分に柔らかくなってから、私にそのひとかけらを差し出すのであった。[I, 50-51]

葉袋から掴み出された葉の老化と乾燥は、小説の大団円で老齡の登場人物たちがゲルマント大公妃邸に集う「仮装舞踏会」を先取りしている、とジェルメヌ・ブレは指摘し、「死んだ葉や萎びた花」が煎じ茶のなかで潤びて花盛りのときの生を静かに蘇らせるさまは、「時の破壊的な行為」[IV, 508] によって死を宣告された人や事物に「永遠の生命」を与える文学創造の比喩にほかならない、とセルジュ・ドゥブロフスキは断じた²⁾。

死と再生、復活のテーマが、マドレーヌ菓子との関わりを抜きにして、「菩提樹の煎じ茶」そのものによっても担われているということ——『失われた時を求めて』の美学の寓意をこの一節に断定的に託して終わるのではなく、きわめて重要なそのテーマがここでどのように成立しているのかについてさらに検討をすすめてみることはできないか。「菩提樹の煎じ茶」は復活のモチーフとしての機能をいかにして獲得したのだろうか。

「生垣や樹柵の組格子」や「唐草風の組合せ文様」のように絡みあった茎や葉や花の老いた生。気まぐれで無造作に一見思えるほどに自然な姿でありながら、芸術家の意匠による見事な配置にも見えるのは（先行テキストの一つでは「隠された天真爛漫な技法」³⁾と記されていた）、それが作家プルーストの言葉を経

た映像でもあるからだ。

小説の読者はこの物語場面で記憶の反芻を促されている。その場面を記憶に蘇らせたマドレーヌ体験の情景が思い起こされるからだ。思い出された情景の語りのなかで、それを思い出す行為そのものが回想される——回想する「私」の物語が、回想されるその時間のかつて生きていた「私」の物語のほうから逆照射されているわけである。

ここで思い起こしておきたいのは、「コンプレー I」において、無意志的記憶の発動が「紅茶とマドレーヌの味 (goût) に関係がある」のは明らかなのに、それを解説する語り手の言葉のなかでは「風味」と並んで「匂い」が問題にされていたことである——

古い過去のうち存続するものが何もなくとも […] 唯一、匂い (odeur) と風味 (saveur) だけは、か弱くはあってもより根強く、形はないままずっと執拗に、より忠実に、魂のようになお長く残っていて […] 回想の巨大な建築を撓むことなく支えるのである。[I, 46]

マドレーヌを浸した紅茶の「最初の一口」の「風味」[I, 45] を反芻しているときに突如蘇った、菩提樹の煎じ茶に浸したマドレーヌの「味」を追求しながら、なぜ「匂い」という要素にまで語りが拡散したのか。この奇妙さは、物語の内的照応に注目してみて初めて納得のいくものとなるだろう。実のところ、回想場面で水中花のようにコンプレーを復元させたマドレーヌの「味」は、時をはるかに隔てて、回想される場面の「匂い」に結びついている。かつて匂っていたものの復活を語る「菩提樹の煎じ茶」のテキスト。「菩提樹」はまさに花が匂う植物なのである。

死と再生——芳香

レオニー叔母の部屋で袋に収まって、干涸らび、縮んで仮死状態で生きているものが、かつて「駅前通り」の街路樹として芳しい香りで町を満たしていた瑞々しい大きな菩提樹そのものであったことを語り手は知っている。「駅前通り」は、復活祭でコンプレーを訪れる語り手と家族の散歩コースの「極限」を成していたのであって、そこを過ぎると「キリスト教国の彼方」「文明世界の外」に出てしまう、そんな異界との境であるかのように、「駅前通りはその菩提

樹や月光に照らされた歩道とともに目に浮かんでくる」のである [I, 113] ——

私たちは駅前大通りから引き返したものだ。そこには、この町でも非常に感じの良い別荘があった。それぞれの庭に、月の光が、まるでユベール・ロベールの絵のように、白い大理石の割れた階きざはしや噴水や開きかけの鉄柵を撒き散らしていた。その光は電信局の事務所を破壊してしまっていて、もはや半ば壊れた石柱しか残っていないかのようにだったが、それでも不死の廃墟の美が保たれているのであった。私は足を引きずりながら、眠くて倒れそうだった。芳香を漂わせている菩提樹の匂い (l'odeur des tilleuls qui embaumait) は、たいへんな疲れと引き替えにしか得ることのできない褒美、しかしだからといって価値があるわけではない報酬のように、私には思われるのだった。[I, 113]

注意も払わぬままに感じていた樹の「匂い」が真に認識されるのは、それが煎じ茶のなかに色や形の回想とともに再生するときである。回想する場面の視覚と回想される場面の嗅覚、時間を隔てた嗅覚と視覚の呼応は、プルースト的記憶のなかで働く共感覚の例とも言えよう⁴⁾。

カトリック教会の祭式で用いられる祝別された香油、すなわち聖香油は baume もしくは saint baume と呼ばれるが、「香気で満たす embaumer」という語は「死体に香料を詰めて防腐処置をする」という意をも含み、瑞々しい命のなかですでに用意されていた死の準備の儀式を思わせる。受難週にベタニアの女が「雪花石膏 un vase d'albâtre」の壺を割って高価な純粋の「ナルド香油〔インドの香木からとる樹液〕」をイエスの頭に注いだとき、イエスが言った言葉——「この女は、私のからだに香油を注ぎ (embaum[er])、予め葬りの準備をしたのだ」という言葉——とともに記憶されている香油の役割がそうであったように (『マタイによる福音書』26, 6-13; 『マルコによる福音書』14, 3-9)⁵⁾。ヨハネによれば、そのベタニアの出来事は、イエスが死者のなかから甦らせたラザロと食卓を共にした時のことだった (『ヨハネによる福音書』12, 1-8)。死と復活の儀式に関わる香油。安息日あけの翌朝早く、墓のなかのイエスの遺体に塗ろうと香油 (香料) を携えて行き、そこで救世主の復活を目撃したマグダラのマリアが^{アラバスター} 画像学的に手にするのも雪花石膏の香油壺である (先のふたりの無名の女はしばしばマグダラのマリアと同一視されてきた)。

「雪花石膏 albâtre」という語は、レオニー叔母のためにコンプレーで菩提樹の煎じ茶が用意される挿話の先行テキストにおいて繰り返し現れている。すな

わち1910年のカイエ28では、乾燥した菩提樹の花付きの茎が「鳥の巣」のように絡まっているさまが「雪花石膏の森 la petite forêt d'albâtre / futaie d'albâtre」と形容されており、そのなかにあつて花が「曙のような明るさを与えている」と語られていたのである。雪花石膏は滑らかな白さや半透明をイメージさせるが、幾つかの色が層状になっているものもあり、古くから小瓶や水差し、灯のガラス、家具調度などの素材になってきた。また、20世紀初頭には照明器具に利用されて新たに注目を浴びたという⁶⁾。近代の仄かな光源の器にもなったアラバスター。灯覆^ほに見立てられた菩提樹の茎の茂みの奥に垣間見える花の命の記憶。「匂い」を介して、菩提樹の煎じ茶と、聖香油を象徴とするマグダラのマリア（マリー＝マドレーヌ）とが結びつく。マドレーヌの名をもつ菓子と菩提樹の煎じ茶の関係に、死と復活のテーマを与える必然性をプルーストは見出したのであろう。

雪花石膏はまた、古代のエジプトでは埋葬用の壺（ミイラの内臓を収めたカーノーボスの壺など）に用いられた。印刷稿テキストに古代エジプトの死と再生のイメージを呼び込んでいるのは、「複製、分身、生き写し double」という語である。『20世紀ラールス百科事典』は double に古代エジプトの精霊あるいは「神的存在」である「カ Ka」の意を認めており、人の「分身」たるカは人の死後ひとたび遺体を離れ、オシリスの儀式によって浄められミイラとなった身体とふたたび合体するという（大地の神と天の神の子オシリスは弟セトに殺されるが、妻の女神イシスの秘術で復活し、冥府の神となった⁷⁾）。プルーストがその意味に通じていたと思われるのは、『ゲルマンのほう』で、ラ・ベルマに対する熱狂が冷めてしまったことについて次のように語る一文があるからだ――

私の信仰、私の欲望はもはやラ・ベルマの朗読法や姿勢に不断の崇拜を向けにやってくることはなくなり、私が心のなかに抱いていた信仰や欲望の「分身 double」は衰弱してしまっていたのだった、まるで古代エジプトの死者たちの命を維持するためにはその「分身」に絶えず糧を与えて養ってやらねばならなかったように。[II, 336]

もっとも、ミイラに施される防腐を兼ねた芳香剤 (baume) が来世での再生までの待機期間に薫るものであるのに対して、菩提樹の仮死の眠りのなかでは封じ込められている花の過去の芳香が解き放たれるのは、それが再び潤いを得る

瞬間、熱湯のなかに浸されて再生する時である。

さんざしから菩提樹へ

無意志的記憶によってコンブレーがその全体において甦る特権的瞬間の場面については、吉田城が詳細に検討したとおり、5つの先行テキストにおいて変遷を確認できる⁸⁾。『サント＝ブーヴに逆らって』の序文とされる「プルースト45」のテキスト（1909年初頭あるいは1908年末）では、グリルしたパンと紅茶の組合せだったのが、1909年のカイエ8およびカイエ25ではビスコットと紅茶になり、「プルースト21」（1909年）でマドレーヌ菓子と紅茶になって、印刷稿 [I, 44] と同じベアになるわけだが、回想する場面の飲み物が一貫して「紅茶」であったのに対して、回想される場面のほうは奇妙にもそうではない。

印刷稿では、紅茶に浸したマドレーヌの味と同じ感覚に導かれて「突然現れた」のはレオニー叔母が同じ菓子を浸して差し出してくれた「紅茶か菩提樹の煎じ茶 *infusion de thé ou de tilleul*」, 逐語訳すれば「(紅)茶を煎じたもの、もしくは菩提樹を煎じたもの」[I, 46]の「回想」であると語られる。それに呼応すべき過去の場面においては、たしかにフランソワーズが煎れる「紅茶」と語り手が用意する「菩提樹の煎じ茶」とが並んでレオニー叔母の飲み物として報告されてはいるのだが [I, 50], 続いて実際に描写されるのは、熱湯のなかで潤びていく「菩提樹の煎じ茶」の形状のみなのである。回想する場面の「紅茶」, 回想される場面の「菩提樹の煎じ茶」, このずらしは何を意味するのだろうか。

レオニー叔母の「煎じ茶」の描写 [I, 50-51]の先行テキストとしてプレイヤッド版が挙げるカイエ28（1910年）の4つの断章 [I, 719-724]を見てみよう――

断章1：C-28, f^{os} 20 à 23 r^{os}, ajout barré [8行ほど書きかけた断章を削除し、あらたに書き始めた断章を削除]

断章2：C-28, f^{os} 20 v^o et 21 v^o, ajout barré [加筆後, 削除]

断章3：C-28, f^{os} 21 à 23 v^{os}

断章4：C-28, f^{os} 22 v^o et 23 r^o

断章1では、叔母のための「煎じ茶」の用意を任されていたのは女中である

(「私の叔母が煎じ茶 (tisane) を飲む時間だった。フランソワーズは薬袋を振って、花の付いた茎を盆 (plateau) の上に落とした」)。その役目が印刷稿のように語り手自身となったとき、その眼のもとに徹底した観察と描写が可能となるのであろう。さらに、煎じ茶の元の「植物 plante」は「菩提樹」とは呼ばれていない。特定されぬままに、乾燥したその花茎の固まりは「さんざしの茂み buisson d'aubépine」を思わせるものとされ、干涸らびて捩れたり破れている「レース状の」葉も、さんざしと同種の「野薔薇 (églantine) の花びらのよう」である。それはかつて「ある暑い一日、ヴィヴォンヌ川のほとりに寝転がって、私が見つめていた植物そのものだった」というのである。

乾燥した茎と花の集まりが「さんざしの茂み」に喩えられているのは断章2でも同じである。この2つの断章に見られたさんざしの比喩が後に放棄されるのは、さんざしには性愛の官能性を担わせて物語の別の場面に移し、煎じ茶の挿話では主題を再生＝復活に絞る、というテーマの選択的集約の企図が作家が持ったためではなかろうか。断章1にすでに見られる「全ては生き残っていた tout est survécu」[C-28, 22 r^o] という表現、断章3と4に記されている「永生 survivance」[C-28, 23 v^o, 23 r] という語を受け止めるべきものとして、「菩提樹」の名は、しかしながら、まだ現れてはいない。また、そうした言葉が意味しているのは、生き長らえることあるいは死後にまでも続く生であって、再生ではない。復活の主題が強く浮かび上がってくるのにはしばし時を要するだろう。

実際、1910年のこの4つの断章いずれにおいても、煎じられているものは「植物 la plante」とだけ記されるか、あるいは言及が避けられている。その花付きの茎が「さんざし」や「野薔薇 églantine」、あるいは「エニシダ gènets」 「青い果実 fruit vert」 「アネモネ anémone(s)」 「さくらんぼ cerises」 「苺の花 fleur(s) de fraisier(s)」 「小さな黄金の薔薇 petites roses d'or」 に喩えられてはいても⁹⁾、名指されることはないのである。そうした花々の比喩はやがて薔薇に集約され、印刷稿では煎じ茶のなかに薔薇のイメージが漂う（乾燥した菩提樹の葉は「薔薇の花びら」のようであり、蕾は「薔薇色の輝き」を帯び、花は「小さな黄金の薔薇のように」浮かんで、「薔薇色の炎」を熱湯のなかに灯す）ことになるのだが、その場には不在の薔薇を集中的に比喩に用いたのは、マルティン・ショーンガウアーやシュテファン・ロツホナーによる祭壇画にみ

られるような「薔薇垣の聖母」の伝統的な主題と、金地に薔薇の樹橋トリスを配した描法を作家が意識していたためだろうか。花がやはり強く匂う「薔薇」が比喻としてのみ言及され、煎じ茶となる植物そのものの役を負わなかったのは、その寓意があまりにも限定的に理解されることをプルーストが望まなかったからかもしれない。

マドレーヌと菩提樹の絆

1909年内にはすでに無意志的想起の場面における「マドレーヌ」と「紅茶」の組合せが確立していたにもかかわらず¹⁰⁾、回想されるほうの場面で入念な描写の対象になる飲み物が、1910年のカイエ28でも依然として名の特定されぬ「植物」の「煎じ茶」であったことは注目に値する。それが、かつて身近に生き生きとした姿で花咲き葉を揺らしていた姿を語り手に思い出せることができるような「復活」の「植物」にふさわしい名前を獲得するのは何時なのか。

「茶 thé」は、異文化圏の植物である。マカオを発ったポルトガル船によってヨーロッパにもたらされたのが17世紀初頭、フランスでは17世紀半ばにルイ14世の主治医が健康増進のために薦めたというが広まらず、19世紀末のイギリス趣味の流行で生活に入る程度の馴染み方であった。ヨーロッパに古くから自生し、コンブレーの植生として馴染まれる植物系ではないのである。それを逆手にとって、思いがけなく回想がよみがえることになる特権的瞬間の場面では、記憶にも習慣にも繋がっていない（「私がふだん飲む習慣のなかった *contre mon habitude*」[I, 44]）「紅茶」のほうが劇的效果は強まるとプルーストは考えたのかもしれない。

一方、回想される日まで忘却に堪えうる植物モチーフには何がふさわしいだろう。カイエ28の4つの断章では、熱湯に潤びる花茎の姿が細密画のように見つめられているのみで、印刷稿のような「香り」が問題にされていないことに注意しよう。特権的瞬間において、ふだん町の店先で眺められていただけのマドレーヌ菓子が、味覚によって初めて無意志的記憶を発動させたように、煎じ茶となった植物の視像が嗅覚を伴ったときにこそ、時を隔てた共感覚のなかで回想は十全なものとなるのである。「コンブレー時代の […]」かくも多くの日々のイメージが最近になって取り戻されたのは、一杯のお茶の風味 (*saveur*) ——コンブレーでは「香り *parfum*」と呼んだであろうもの——によってであった」

[I, 183]¹¹⁾。

香りの強い植物の煎じ茶。菩提樹はその花の香り高さの記憶ゆえに、復活の効力を託されてテキストに登場してくるだろう。そしてその出現は、きわめて興味深いことに、タイプ原稿の上で、「紅茶」に浸されるべき「ビスコット」が「マドレーヌ」に書き換えられた箇所に認められるのである。

1909年秋のタイプ原稿では¹²⁾、レオニー叔母の部屋で味わう「ビスコットと紅茶」はひとつの文で言及されるだけで、描写は伴っていなかった¹³⁾。その文章にプルーストは自筆で加筆修正を施している――

しばらくすると、私は彼女に挨拶の接吻をしに入っていくのであった。彼女は私に紅茶 <あるい菩 [提樹*]> [加筆] に浸したゼスヨット [削除] <プチット・マドレーヌのかけら> [加筆のち赤字で削除] を味わう [削除] <私自身で注ぐ> [加筆] よう促されるのだった。¹⁴⁾

Au bout d'un moment, j'entrais l'embrasser ; elle me faisait goûter [barré en rouge] <verser moi-même> [ajouté en rouge] d'une biscotte [barré] <un morceau de petite madeleine> [ajouté puis barré en ligne rouge] trempé dans son thé <ou dans son tisane de til*> [ajouté] [NAF 16752, f° 154 r°]

「ビスコット」に代わった「プチット・マドレーヌ」を叔母にすすめられて「味わう goûter」行為を、それに先立って「私自身で注ぐ（振り出す）verser moi-même」行為に修正したとき、その対象となる飲み物についてあらためて文章を整える必要をプルーストは感じたのだろう。書きかけのままの「煎じ茶」の材料名とその描写は、このタイプ原稿の裏ページに綴られている――

私を驚嘆させていたのは、まるで薬剤師の貴重な浪費のように、菩提樹のほっそりとした茎が […] 準備されたものではなく […] 駅前通りを散歩していた時に私たちの上に<私たちの足元に>降ってきたままの<花のついた茎>、わずかに年老いて、軽い変化を伴ってはいても […] 菩提樹の花の複製ではなく、そのものでしかないひとつの生の継続であるということに気づくことだった。加工の準備のなかではとり除かれてしまったであろう千もの無用の細部は、時満ちるに至らずに死んだ緑の小さな胚や、年をとったばかりの〔茎〕のように、かなりの変化を被ってしまっていて、それが複製ではなく、ひとつの体とひとつに命をもっていて、葉袋を花盛りにする前には夏の宵を香りて満たしていたとかろうじて感じられるほどだった。 […] フランソワーズは、叔母の好む淡い風味が沸かした湯に移る時間が十分にたったと判断すると、

それを注ぐのだった。叔母はそこにプチット・マドレーヌを浸せ <砕いて入れ> 浸し、それがしっかり柔らかくなると、私にその一片を味わわせるのであった¹⁵⁾。

このテキストが印刷稿の「菩提樹の煎じ茶」の挿話の後半にあたるのに対して、その前半はタイプ原稿上の別の加筆に認められる。修正中に消し残された語や加筆された語の重なりなど統辞の乱れを含んだままのプルースト自筆の加筆断章の冒頭の拙訳と転写を試みる――

私は彼女に挨拶のキスをしに入ってしまった。フランソワーズが叔母のために紅茶を煎れさせる (infuser son thé) のだった。ときどき気分が高ぶるのを感じると、叔母は代わりに菩提樹の煎じ茶を求めた。そして、その場合には、私に叔母はそれを任せるのであった。というのは、薬剤師の袋から必要な量の花付きの枝先を取り出し<振り出し>て、それを見るのが私は好きであることを彼女は知っていたからである。叔母は、煎じ茶に必要な量の紅茶もしくは菩提樹を、<叔母がすこし気持ちの高ぶりを感じる時や菩提樹の量を必要な量の花付きの茎を取り出すときには><その方が私には見るのが楽しかったが>、私に自分で振り出させ、それをフランソワーズが持っている湯沸かしティーポットに入れるのであった。[…]¹⁶⁾

J'entrais l'embrasser. Françoise faisait infuser son thé. Quelquefois se sentant agitée ma tante demandait à la place du tilleul. Et dans ce cas, c'était moi qui étais chargé <qu'elle chargeait> car elle savait que j'aimais les voir de prendre <verser> du sac du pharmacien la quantité qu'il fallait de têtes fleuries. Elle me faisait verser moi-même la quantité de thé qu'il fallait pour son infusion ou de tilleul, <ce qui me plaisait mieux à voir>, les mettre à <[si] elle se sentait un peu agitée ou si elle prenait la quantité <du sac> de tilleul qu'il fall[ait] la quantité de tiges fleuries qu'il fallait> dans la bouillotte théière que tenait Françoise [NAF 16730, f° 96 v°]

この断章には、印刷稿には記されていない「見る」楽しみもはっきりと語られている。薬湯袋から取り出された「菩提樹」の花や葉茎の姿、そしてそれらが湯のなかで潤びるさまを「見るのが私はいっそう好きだった ce qui me plaisait mieux à voir」とあるのは、「紅茶」の準備を眺めるよりも、という意味か。

また「菩提樹の煎じ茶」である必然性は、印刷稿 [I, 50] と同様、レオニー叔母の体調によって説明されているその鎮静効果にある。この点についてさらに考察してみよう。

「コンブレー II」の回想される場面での加筆は、「コンブレー I」の回想する場面での修正に応じたものである¹⁷⁾。マドレーヌ体験の最後に言及されている、レオニー叔母の飲み物の「紅茶」に「菩提樹の煎じ茶」が加わるさまは、タイプ原稿上の加筆で次のようにぎこちなく語られていたのだった——

突然、思い出が私に現れた。この味は、毎朝コンブレーで私が朝の挨拶を言い
 <部屋に> [加筆] 行くとき、レオニー叔母が紅茶のなかに十分に浸して、その後、私
 にくれた<紅茶 [削除] >ある時は> [加筆のち削除] 紅茶と [削除] <もしくは>
 [加筆] ある時は [削除] 菩提樹の煎じ茶のなかに浸してから私にくれた [削除] <差
 し出した> [加筆] > マドレーヌのかけらの味だった¹⁸⁾。

Et tout d'un coup le souvenir m'est apparu. Ce goût c'était celui du petit mor-
 ceau de madeleine que tous les matins à Combray, quand j'allais lui dire bonjour
 <dans sa chambre> [ajouté en rouge], ma tante Léonie ~~trempait dans son thé et~~
~~me donnait ensuite~~ <me donnait [2 mots en rouge] <offrait> [ajouté en noir]
 après l'avoir trempé dans son thé [7 mots en rouge] <son> infusion <tantôt> de
 thé et <ou> tantôt de tilleul>. [NAF 16730, f° 92 r°]¹⁹⁾

「紅茶」を愛飲する叔母がときには「菩提樹の煎じ茶」をとることになった理
 由については、叔母の「神経の高ぶり」を鎮めるのにふさわしいものだから、
 というテキスト外的な現実感覚によっても納得できそうに思われる。しかしな
 がらタイプ原稿の修正で見る限り、鎮静剤の効果への配慮はむしろ後付けのよ
 うなのだ。というのも、タイプ打ちされたテキストで、レオニー叔母の神経質
 な人物造型——「悲しみと、身体の衰弱と、病と、固定観念と信心という不安
 定な状態でずっと横たわって、ベッドを離れなくなっていた」老女 [NAF
 16730, f° 95 r°] ——はすでに印刷稿 [I, 48] と同じものにできあがっていた²⁰⁾
 のであって、それでも彼女は「ビスコット」を浸すための「紅茶」を用意させ
 ていたからである。とすれば、回想される場面における「菩提樹の煎じ茶」の
 登場は、なによりその再生=復活の効力を担わされてのことではなかったか。
 そしてその効力は、救世主の復活に立ち会ったマグダラのマリアに名の縁をも
 つ菓子と結びつくことによってこそ最大限に発揮されるものとブルーストは考
 えたのではなかろうか。

「プチット・マドレーヌ」と「菩提樹の煎じ茶」——その絆はたしかに『失わ

れた時を求めて』という「回想の巨大な建築物」を支える要石となるべきものであったのだ。

花の季節——夏から春へ

復活を約束された死の香り。菩提樹の花の芳香に包まれて蘇るコンブレーの日々。復活のテーマを効果的に演出しているのは、語り手がそこを訪れていたのが「復活祭の休暇」であったという物語の枠組である。

ところで、*tilleul* すなわちセイヨウシナノキの学名を持ち菩提樹の名で親しまれているもののヨーロッパにおける開花期は初夏から夏、多く6-7月である。しかしながら、小説中の菩提樹の花の香漂う宵の散歩は「大気が暑い」日ではあるものの、「マリアの月」の祭式を翌日にひかえた5月の土曜の夕食後、教会を訪れて「さんざし」を愛でた帰りのこととして語られている [I, 113]。移動祝祭日である復活祭（春分の日の後の最初の満月の次の日曜日、すなわち3月22日から4月25日の間のいずれかの日曜日）が遅めの年で、その休暇が5月初旬にまでかかっているのだと現実的に推察すれば、菩提樹の平均的な開花期に最大限近づけることもできようか。

そもそも、「堅固な形を備えて」回想される「全体としてのコンブレー」、すなわち「復活祭の前の週にやって来て」レオニー叔母邸で復活祭を過ごすという「コンブレー II」 [I, 47-184] の時間枠はいたるところで撓んでいて、思い起こされるべき「夏」のコンブレーの日々の存在があることも排除しないのだ²¹⁾。「私たちがそこにいた何か月かの間」 [I, 52] という一節、あるいは「秋の霧に煙る朝」のコンブレーの教会の鐘塔の記憶など [I, 62] が、さまざまな季節を密かに含んだ「復活祭の休暇」の物語を示唆しているのである。

「菩提樹」が登場する以前の先行テキストにおいて、煎じ茶の元の「植物」は、季節であれば春・初夏・夏、時間は午後か日中（古い先行テキストでは「春の朝」²²⁾）に結びつけて語られていた。それは、「ある暑い日、ヴィヴオンヌ川のほとりで横になって私が見つめていた植物」（断章1）、「ある暑い日、木々の下に寝そべっていたときに、日蔭で見つめられたことがあった植物」（断章3）であり、煎じ茶の入った葉袋は「夏の午後 un après-midi d'été」（断章3）あるいは「とある夏の日 un jour d'été」（断章4）のように「花ざかりになって fleuriss[er], fleurissant」いる。この暑い日中の情景の一方で、苺の花の喩えは

「日没 couchant」「夕暮れ crépuscule」「傾きかけた陽光 rayons déclinants」のイメージを連れてくる（断章2，断章3）。すなわち，春の宵である。

夏か，春か，昼か，夕べか。カイエ 28 の4つの断章のなかで揺れていた問いは，タイプ原稿への加筆のなかにまで持ち越されている。「マドレーヌ」が浸される「煎じ茶」を「菩提樹」として語りながら，加筆のひとつ [NAF 16752, f° 154 v°] では「その花は，煎じ茶の袋を花ざかりにする (fleurir) 前には，夏の夕べを香りで満たしていた (embaum[er] les soirées d'été)」と記されているのに対し，別の加筆 [NAF 16733, f° 93 bis r°] では「その花びらは，薬袋を花ざかりにする前には，春の宵 (avant de fleurir le sac de pharmacie avaient embaumé les soirs de printemps) を香りで満たしていた (ces pétales étaient bien ceux qui)」とあるからである。後者のほうが印刷稿に受け継がれて「春の宵を香りで満たす」[I, 51] という表現に落ち着くことになるわけだが，その判断の理由は明快であろう。

「復活祭」の時節という物語の枠組みによって復活のテーマを支えるという意図がなければ，春である必要はなかったはずなのだ。テーマの演出のために，リアリズムへの配慮は大きく譲歩させられている。そして，煎じ茶のなかによりみがえる花ざかりの菩提樹の匂いの記憶に復活のテーマを封じ込めた印刷稿では，先行テキストにあった「永生 survivance」[C-28, 23 v°, 23 r°] という語，「全ては生き残っていた tout est survécu」[C-28, 22 r°] という表現はもはや必要とされていないのである。

薬湯としての効果が歴史的に記憶されてきた菩提樹の煎じ茶は，ブルーストの幼少期には，特にその「花」を乾燥させたものを使ったようである。『19世紀ラールス百科事典』(1865-1876)は「ヨーロッパ全土で広く普及している」西洋菩提樹 «*Tilia europaea*» の植生について詳説しながら，その効用について述べている——「菩提樹の花は煎じて (infusion aqueuse) 鎮痙剤や精神安定剤として処方され」「紅茶と同様，消化不良に効く」，また「心臓病や，心気症，ヒステリー，嘔吐感など，神経性の疾患に対してよく用いられる」等々。

ブルーストが煎じ茶のなかの「花」や「花付きの茎」にことさらに注目し，「薬袋を花盛りにする」イメージにこだわっているのは，菩提樹の煎じ茶には十分に咲ききったところで収穫された薫り高い「花」を用いるという時代の理解をふまえてのことだろうか。というのも『20世紀ラールス百科事典』(1928-

1933)になると、鎮静効果に最も優れた良質の菩提樹は南仏ヴォークリューズ県のカルバントラのもので、6-7月に収穫されたその「葉」が煎じ茶に使われる、と記されているからだ。『失われた時を求めて』の執筆がもう10年ほど遅く開始されていたら、菩提樹の煎じ茶の描写も少なからず変容していたかもしれない。

テキストの記憶——『菩提樹の木の下で』

本稿を閉じるにあたって、プルーストの心に浮かび上がり得たもうひとつの記憶について触れておこう。それは読書の記憶、ドイツ娘との愛にまつわる菩提樹リンデンバウムの思い出を綴ったかつての人気作家のテキストの記憶である。

『菩提樹の木の下で』(1832)で一躍文壇に躍り出たアルフォンス・カール(1808-1890)は、自伝的要素に基づく感傷的でアイロニーを漂わせた作風でその後も長く人気を博した²³⁾。ノルマンディーを舞台にした小説をはじめ多数の作品を発表する一方で(エトルタでの避暑が流行したのも彼の小説の影響とされる)、『フィガロ』紙の編集長を務め、後に風刺パンフレット『雀蜂 *Guêpes*』(1839-1846)を発刊、また1848年にはルイ＝ナポレオン・ボナパルトの大統領選を阻止するべく『ジュルナル』紙を立ち上げるなど、精力的なジャーナリストでもあった。

プルーストが書簡でカールの名を挙げるのは、とりわけラスキンに関わる文脈においてである。1904年4月のロベール・ド・フレール宛の手紙では、3月15日の『リベルテ』紙に掲載された「不信仰の宗教」と題する文章のなかでロベールが、ラスキンとカールを引きながら、『アミアンの聖書』の「エレガントで力強い」翻訳に賛辞を送ってくれたことに言及している²⁴⁾。当時、政教分離の議論が沸騰していたさなかに上梓されたアミアンの教会をめぐる翻訳書の運命に、ロベール・ド・フレールはアルフォンス・カールの『良識の種』(1880)を引き合いに出して援護の手をさしのべたわけだが²⁵⁾、それに対しプルーストは、「『千一夜物語』で古いランプを新しいものに取り替えた人物のように」、ロベールによって「アルフォンス・カールの使い古された良識の種が見たこともないほどの輝きと新鮮さを取り戻している」と感じた、と告げたのだった。「君は火で煤けたあの古いランプに、今日的な状況をきわめて明瞭に照らし出す光を与えることができたのです。」

1904年もしくは1906年、ラスキン翻訳を上梓した際のものとしてされるロベール・ド・モンテスキウ宛の手紙では、ラスキンによるアルフォンス・カール評への言及がある²⁶⁾。『アミアンの聖書』「父祖たちは吾等に語った」第1章36節でラスキンは述べていた——「この驚異に満ちた書、アルフォンス・カールの『良識の種』も、最近の作『ぶんぶん』も、私が自分の気持ちに正直に言うとは称賛することはできないのは、それが完全に私の心になかった人のものであるからなのだ。著者はフランスにおいて、私がイギリスにおいて何年も前から言っていることを述べたのである。互いに知らず、ともに虚しく（『ぶんぶん』の11-12節を見よ）」。

こうした考え方に対して、ブルーストは、「我々の判断の働きかた (dispositifs) こそが重要なのであって、それをしかじかの誰かに適応することは、時代や国によっておおいに変化するものです」と、モンテスキウ相手に主張している。「スタンダールがゴシックの大聖堂はフランスの恥であると言ったように」、また「サント＝ブーヴがバルザックについて犯した見誤り」のように——「ラスキンが自らをカールに比して語ったことは、ユーモアからであり、政治的な立場からでもあり、また同時に天才の崇高なる無意識によるものでもあったでしょう。天才とは、自らの師に、自分よりも果てしなく劣った人間を見ようとするものなのです」²⁷⁾。この言葉は、やがて着手することになるブルースト自身のサント＝ブーヴ批判の意味を示唆する一節でもある。読書を通して自らを育ててくれた師への恩返しは、師の功罪を、特に強くその「罪」の面を、提示して乗り越えることでしかないこと、そして、先達作家への批判は、それが時代の巨匠であればなおさら、その作家にそう書かした時代の文学的心性そのものへのプロテストとなるはずであることを、ブルーストはたしかに自覚していたのだった。

また間接的な言及ではあるが、ジャック・ブーランジェ宛の1920年1月13日付の手紙では、ジョッキーの綴り «jokey / jokei» に関して、この『ルイ＝フィリップ王政時代のダンディたち』（1907年、再版1912年）の著者がカールによるジェラルド・ド・コンタード『フランスにおける競馬』（1892年）の書評の一節を引いていることにもブルーストは触れている²⁸⁾。

もうひとつの菩提樹 / マドレーヌ

アルフォンス・カールの処女小説のタイトルとブルーストの関係を考えるう

えで手がかりとなるのは、1890年に亡くなった作家について『ル・タン』紙が2回にわたって3段の追悼記事を載せ、その2回目の文章をしたためたのがアナトール・フランスだったということである²⁹⁾。1861年コレージュ・スタニスラスに通っていた17歳当時、愛に苦悩し女の不実を嘆く学友の言葉が、カールの最初の小説の言い回しと浪漫的センチメンタリズムの受け売りであったことを回想しながら、世紀末の文壇の巨匠は往年の流行作家を葬り去さろうとする——「今となっては、そうしたことは何と子供っぽく、そして古めかしく見えることだろう！それが1832年から1840年にかけて、世の美しい眼に涙させ、恋する女性の胸を溜め息で膨らませた本なのだ！それはもはや私たちには滑稽なたわごとでしかない……」。アナトール・フランスはまた、「文体と美しい形式なしに」靈感のみによって書くことができた時代が終わったことを告げている。作家にとって、ロマン派の陶酔的エクリチュールの「香りは飛んでしまったのだ」と。

19世紀を通じて版を重ねてきた小説『菩提樹の木の下で』は、出版当時の「セナークルが浸っていたドイツへの感傷的偏愛」³⁰⁾を反映している（ゲーテやシラーからの引用が小説の至るところに現れている）。またそのタイトルは伝統的に、「菩提樹の下で」行われる行為、すなわち恋人たちの口づけや誓いを喚起するものでもある。

ゲッティンゲンで学業を続けながら詩を書いている主人公は、園芸と植物学に熱中する老紳士の家に部屋を借り、草花や木の名前の語源に関する家主の研究の手助けをすることになる。庭の小径に植えられた菩提樹の語源には、とりわけ家主が強い関心を示す——

「小径の初めにあるのは北アメリカ原産の菩提樹で、葉が綿毛のようで、下から見ると銀のように白いため *tilia argentea* と呼ばれているものです。花は8月にしか咲きませんが他の変種 *tilia rubra*, *tilia pubescens*, *tilia alcinala*, *tilia microphylla* 等々に比べてはるかに香りが強いのですよ。オランダでは運河のほとんどが菩提樹で、両岸が縁取られています。オランダ菩提樹は葉がもっと細くて暗い色をしています。ほら、小径の4番目の樹がそうです」——「あれはきれいな樹ですね。大きな木陰をつくって、馥郁たる香を放っています」——「ええ、6月にはね。あの樹皮からロープができますし、木片は火薬の原料に含まれる最良の材質です。*tilia* という語はギリシャ語の *πιολογ* すなわちペンに由来するもののように思われます。というのも、ペンにかなり似た小舌状片の上に花を付けますからね。[...] *telum* という語源は完全に

正しいと思いますよ、だって古代人は菩提樹の木片で矢や投げ槍をつくっていたのですから。内皮のほうは一種のパピルスをつくるのに使っていました。おそらく千百年前にそうした方法で書かれたマニュスクリを私は家にもっているのですよ。お若い方、あなたには学がおありですから、*tilia* という語の本当の起源をお聞きしたいのです。*telum*の方は明らかですからね。今宵、我が家にいらしてビールと煙草をご一緒しませんか。マニュスクリを見ていただいて、今の話を続けましょう」³¹⁾

ペンと紙に縁があるという菩提樹に詩人として心惹かれたというよりも、庭で一度見かけて想いを寄せ始めていた娘の父親からの誘いであることから、主人公は家主宅を訪れることを約束する。ところがその日の夕方、主人公は、前線に向かう弟を見送るために、理由も告げずに急ぎ出かけることになってしまふ。翌晩、雨に打たれた姿で詫びに来た主人公を招き入れた家主は、彼のために「お茶を入れさせる」（「これは健康に良い飲み物ですから」）。弟への想いに心沈む下宿人に共感のまなざしを向ける娘。父娘にせがまれて、主人公は「さんざしの上のジグロムシクイ」を描いたゲーテの詩を歌う。以来、娘と主人公は心を通わせていき、ある初夏の夕べ、庭の菩提樹の木陰で、ふたりは手を取り合って愛を確かめ合う（「第 XV 章 菩提樹の下で」）。感極まった主人公は娘をそのドイツ名マグダレーナではなく「マドレーヌ *Madeleine*」と思わず呼び、「第 XVII 章 さんざし」ではマドレーヌにさんざしの花冠を贈って将来を誓い合う。ふたりの思い描く夢の家には花咲乱れる庭があって、菩提樹が爽やかに深く茂り、さんざしと野薔薇の垣で囲まれていることだろう。いや、むしろ高い垣根にして、内側にさんざしと花の香りでいっぱい野薔薇を這わせよう、等々と、木陰での恋人たちの語らいは尽きない³²⁾。ロンサールも謳いあげ、革命暦の花月第 4 日の名にも採られたさんざしが菩提樹の周りに咲き誇る理想の庭は、ドイツ文学とフランス文学のマリアージュを夢見させるものか。

『菩提樹の木の下で』には、プルースト小説の菩提樹のモチーフにとり文学的背景を成すものがふんだんに織り込まれていたように思われるのである。

註

- 1) Marcel PROUST, *À la recherche du temps perdu*, 4 vol., Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1987-1989 et 1994. 以下 RTP と略し、本文中では

- 巻数と頁数のみを記す。
- 2) Voir Germaine BRÉE, *Du temps perdu au temps retrouvé*, Société d'édition «Les Belles Lettres», 1950 ; Serge DOUVROVSKY, *La Place de la madeleine*, Paris : Mercure de France, 1974 ; Philippe LEJEUNE, «Écriture et sexualité», *Europe*, n° 502-503, 1971, pp. 113-143.
 - 3) «l'art <ingénu> [ajouté] caché», Cahier 28, 21^v° ; *RTP*, I, 721. フランス国立図書館所蔵の「プルースト資料体」については慣例に倣い、註記では下書カイエと呼ばれるものの番号を「C-算用数字」、清書カイエは「C-ローマ数字」で表す。加筆部分は < >, 削除部分は抹消線で記載する。[] は筆者による補足説明。推察による読み取りには * を付す。
 - 4) 原田武『プルースト——感覚の織りなす世界』, 青山社, 2006 年を参照。
 - 5) プルーストがラスキン翻訳の際に参照したとされる2つのフランス語聖書, スゴン版とオステルヴァルド版 (voir *Dictionnaire Marcel Proust*, Paris : Champion, 2004, p. 143) をそれぞれ 1910 年版, 1892 年版で確認すると, 「香油」は «parfum» «huile odofiférante» «huile de senteur de nard pur», 『マルコによる福音書』14, 8 については «elle a embaumé par avance mon corps pour ma sépulture» (Ostervald, 1892) ; «elle a d'avance embaumé mon corps pour la sépulture» (Second, 1910).
 - 6) Voir *Larousse du XX^e siècle*, Paris : Larousse, 6 vol., 1928-1933.
 - 7) Voir *ibid.*
 - 8) 吉田城『「失われた時を求めて」草稿研究』, 平凡社, 1993 年, 92 頁を参照。
 - 9) 「エニシダのように黄色で, 苺の花のように装っていて, アネモネのように赤く, 夕日のように薔薇色の黄金で, 下草のように花咲いていて」(断章2)。その「小さな花」は, エニシダのように黄色く, 苺の花のように雄蕊で飾られていて, アネモネのように赤く, 古びたレースのように赤茶けていた」(断章3)。
 - 10) 和田章男は「ブチット・マドレーヌの誕生」を 1909 年 11 月末とする。Voir Akio WADA, *La Création romanesque de Proust : La genèse de «Combray»*, Paris : Honoré Champion, 2012, pp. 31-35.
 - 11) 『フランス語宝典』(*Trésor de la langue française*, 16 vol., 1971-1994) によれば «parfum» は「食欲をそそる匂い odeurs apétissantes」, 「飲み物, 料理, デザートの香りづけ」で「味 (goût) そのもの」とも見なされる。
 - 12) NAF 16730 («Première dactylographie»), NAF 16733 («Deuxième dactylographie») et NAF 16752 («Reliquat des dactylographies du *Temps perdu*»). 和田章男によれば, 1909 年の「コンプレー」タイプ原稿への加筆は3つの時期に渡っている (1910 年春まで, 1911 年夏-1912 年夏, 1913 年 2 月-6 月)。Voir WADA, *op. cit.*, pp. 43-60.
 - 13) 続く文章では, 叔母の寝台の脇にある卓の描写に移っていく。卓上にあるのは「聖母像」「ヴィシー水の瓶」「ミサの本」「薬湯 tisane の処方箋 (orzdonnances) [削

- 除] <袋 sac> [加筆]。
- 14) NAF 16752, f° 154 r° (paginé «86»).
- 15) NAF 16752, f° 154 v° (l'envers du folio paginé «86»). *RTP*, I, 1126 には削除部分を割愛し加筆記号を省略したかたちでの転写がある。
- 16) NAF 16730, f° 96 v° (l'envers du folio paginé «85»). ブルースト自筆の加筆断章。この断章の途中に «Ceci est à ajouter je l'ai écrit en noir pour plus de clarté» という作家自筆のメモが赤字で記されている。
- 17) NAF 16730, f° 96 v° および NAF 16752, f° 154 v° の断章の修正は、タイプ原稿上の他の2つの加筆断章に活かされたと考えられる。すなわち、NAF 16733, f° 93 bis r° (paperole; ブルースト自筆の加筆) と NAF 16730, f° 97 r° (paginé «86»; ブルースト以外の手による加筆紙面をタイプ原稿上の該当部分に貼ったもの) である。この2つの加筆についてプレイヤッド版註 (*RTP*, I, 1125) は、前者が後者に転写されたとする。
- 18) NAF 16730, f° 92 r° (paginé «81 bis»). *Cf.* *RTP*, I, 46: «Et tout d'un coup le souvenir m'est apparu. Ce goût c'était celui du petit morceau de madeleine que le dimanche matin à Combray [...], quand j'allais lui dire bonjour dans sa chambre, ma tante Léonie m'offrait après l'avoir trempé dans son infusion de thé ou de tilleul.» また、印刷稿で「コンプレー I」の最後の節の「菩提樹に浸されたマドレーヌ」[I, 47] に相当するタイプ原稿上の箇所では、「紅茶に浸されたマドレーヌ」への修正はなく、あるいは後の修正まで放置されたかたちになっている——*RTP*, I, 47: «Et dès que j'eus reconnu le goût du morceau de madeleine trempé dans le tilleul que me donnait ma tante [...].» NAF 16733, f° 89 r° («82»): «Et dès que j'eus reconnu le goût du morceau de madeleine trempé dans le thé qui me donnait ma tante ~~tous les matins~~, [...]». NAF 16730, f° 93 r° («82») (同文が含まれる20行あまりが大きな×で削除されている)。
- 19) NAF 16730, f° 92 r° (paginé «81 bis»). *Cf.* NAF 16733, f° 88 r° (paginé «81 bis»): «Et tout d'un coup le souvenir m'est apparu. Ce goût c'était celui du petit morceau de madeleine que tous les matins à Combray, quand j'allais lui dire bonjour <dans sa chambre>, ma tante Léonie ~~trempait dans son thé et me donnait ensuite~~ <m'e> a donné<ait> offrait après l'avoir trempé dans son infusion de thé ou de tilleul.»
- 20) NAF 16730, f° 94 r° (painé «83») – f° 95 r° (paginé «84»): «[...] cette tante Léonie, qui, depuis la mort de son mari, mon oncle Octave, qu'elle aimait / passionnément, n'avait plus quitté Combray, puis à Combray sa maison, puis sa chambre, puis presque son lit et ne “descendait” plus, toujours couchée dans un état incertain de chagrin, de débilité physique, de maladie, d'idée fixe et de dévotion.»
- 21) 「暑い天候 temps chauds」[I, 82] の「晴天の日 beaux jours」[I, 70, 82] の部屋

のなかの読書では、外の「夏の光景全体 le spectacle total de l'été」[I, 82] が想像されているし、レオニー叔母の家の食卓に出される「四季のリズムをなにながしか反映した reflét[er] un peu le rythme des saisons」食材には「あんず abricots」や「さくらんぼ cerises」など初夏の果物も含まれる [I, 70]。また、「スワン家のほう」への散歩で目にする「グラジオラス glaïeul」[I, 135] の花は夏に咲く。ブルーストの実体験、すなわちコンプレのモデルとされる父方の郷里イリエを訪れたのが復活祭の時期に限られていたことを証明するものがないこと、また、レオニー叔母の家のモデルのひとつであるオートウイユの母方の実家にはさまざまな季節に訪れていた可能性があることなどを考え合わせれば不自然ではない。

- 22) また、レオニー叔母はまだジュール叔母と呼ばれている時期の手書き断章で、「春の朝」の雰囲気の中、「紅茶 thé にビスケット biscuit を浸して」いる (Reliquat manuscrit, NAF 16729; *RTP*, I, 1126)。
- 23) Voir Alphonse KARR, *Sous les tilleuls* [Paris : C. Grosselin, 1832], Genève : Slatkine Reprints, 1980, «Présentation» de Louis VIRLOGEUX, pp. x-xi.
- 24) Voir *Correspondance de Marcel Proust*, éd. Philip KOLB, 21 vol., Paris : Plon, 1970-1993 Paris : Plon, 21 vol., 1970-1993 [éd. abrégée ensuite : *Corr.*], IV, pp. 113-114 ; Alphonse KARR, *Grains de bon sens*, Paris : C. Lévy, 1880.
- 25) Voir Robert DE FLERS, «La religion de l'incrédulité», *La Liberté*, 15 mars 1904.
- 26) Voir *Corr.*, VI, pp. 353-354 ; Alphonse KARR, *Bourdonnements*, Paris : C. Lévy, 1880.
- 27) *Corr.*, VI, p. 3353.
- 28) Voir *Corr.*, XIX, p. 64 ; et aussi *ibid.*, VII, pp. 60-61.
- 29) Voir *Le Temps* des 2 et 4 octobre 1890 ; KARR, *Sous les tilleuls*, éd. 1980, pp. x-xi.
- 30) KARR, *ibid.*, p. x.
- 31) *Ibid.*, pp. 15-16.
- 32) Voir *ibid.*, pp. 18-19, 20, 32-33 et 40.